

街の灯り物語



©弘兼憲史『課長 島耕作』

灯り——それは
そこに暮らしがある証
さまざまな心模様が描かれ
物語が紡がれている証
迎えてくれる灯り
見送ってくれる灯り
そして見守ってくれる灯り
街それぞれに灯りがあり
人それぞれに
心に残る灯りがある
その一つの物語



©弘兼憲史『課長 島耕作』



ひろかね けんし 漫画家
1947年山口県生まれ。早稲田大学法学部卒。松下電器産業本社販売助成部勤務を経て、74年漫画家デビュー。83年より連載の『課長 島耕作』がヒット。代表作に『島耕作』シリーズのほか『黄昏流星群』『加治隆介の議』『人間交差点』『ハロー張りネズミ』など。『俺たちの老いじたく』等著書多数。コンテンツ産業国際戦略研究会議委員、松下政経塾評議員、講談社漫画賞審査員などを務める。2007年紫綬褒章受章。

人生のシーンを ドラマティックに彩る、灯り 弘兼憲史

漫画家

夜

を彩るライトアップが好きだ。『島耕作』シリーズでも、灯りでさまざまなシーンを演出している。大町久美子の二十五歳の誕生日、二十四本のローソクと、あと一本はライトアップされた東京タワー。午前〇時、ローソクを吹き消すようにタワーの照明を吹き消す……（実は消灯時間）。あるいはロサンゼルスグリフィス天文台から見渡す一面の光の海、ヘリコプターから見下ろすニューヨークの夜景。自分自身が心を動かされた灯りを作品に登場させてきた。

ライトアップは心に響く。建物や樹木を下から照らし出す灯りは、幻想的で格別美しい。

僕にとって灯りは、安らぎをもたらしてくれるものだ。蛍光灯の白い光は、仕事モード。食事をおいしく見せてくれるオレンジ色の光や、空間を優しく包む間接照明に心が落ち着く。そんないわば「薄灯りの美学」にも心惹かれる。

『黄昏流星群』という作品では、人生の黄昏時を迎えた人々の、流星のように一瞬の煌めきを放つ恋を描いているが、「黄昏」の語源は「誰そ彼」——薄暗くて相手が誰かわからないような、心許ない時のこと。源氏物語の中でも「寄りてこそ それかとも見め たそがれに ほのぼの見つる 花の夕顔」という歌が書かれている。闇が訪れる前、世界がおぼろな光に満たされる黄昏時は、

どこことなくあやうげな不思議な魅力があり、昔から黄昏時を「逢魔が時」とも表現する。
ドラマティックにムードイに人生の場面を彩ってくれる灯り——真っ暗な闇は寂しすぎるけど、満月の夜くらいは灯りを消して、月明かりで過ごすのも悪くないかもしれない。たまに暗さを体験することで、改めて灯りの魅力に気づくはずだから。

【文】